しならば、一般の稱讃を博したりしならんものを。

エアン、パウルのゲーテに關して云へるものは是なり。曰く、『予は臆しながら彼に逢はんとて行きたり。あらゆる人は彼は地上の事には總べて冷淡なりと詰したりき。フラウ、フワン、カルブは云へり、彼は既に何人をも稱讃せず、彼自家をすらも稱讃せずと。此語毎句皆氷なり。然るに彼の心情の纖維、温かなるが如き奇事はあらず』と。更に尋で曰く、『彼の家、寧ろ彼の宮殿は、予を歎ばせり。伊太利風にして、斯る樓梯（ステイヤー、ケース）を有する家は、ウワイマルに於ては唯一宇のみ。此繪畫と肖像との充滿せる『合祠廟（パンテオン）』は、予の新鮮なる欽慕心を挑發して、予を壓せり。果然冷淡なる唯一（モノシレーヒック）の神（ガン）は入りたり……彼の顏は大にして眉宇揚れり、彼の眼は是光明の球。談遂に技術に移るや、彼は熱して温かとなれり。彼の談話はヘルデルの如く富贍にして流暢ならざりしかど、透徹銳利にして靜穩なりき。彼は終に未定稿の詩を朗讀せり、寧ろ吟哦せり、其詩に於て彼の心情の焰火は、外面の結氷を透して破れたり……天下彼の朗讀に比すべきものなし。恰も沈々たる雷聲、瀟々たる雨聲に和するが如し』と。

彼の心情の纖維は温なり。

談話。

若しゲーテにして己を知らず、或は虛僞なるものに對して冷淡なりしとするも、彼は同情を表し得べき人に對しては、全く温情を以て交りたりき。即ち知るシルレル及ヘルデルには兄弟の如くにし、當時無名の一教師たりしヘーゲル、及ホメエル譯者の息ウチツス等には、父の如き保護を與へたりき。彼豈竟に人の云ふが如く冷淡にのみ限らんや。

則讃の聲。

ナポレオン、ウワイマルに入りたるは、イエナ戰爭の翌日なりき。公爵夫人ルイセの人民の爲に分疏し、良人の爲に辯解して、其剛勇

ルイセ夫人の贈與。

大膽に驚かしめたるは、則ち此時なりき。

ウワイマル公は孛魯西亞の命に依りて、ナポレオンに服從せり、即ち軍を收めてウワイマルに歸れり、彼は受けし凌辱の報酬として、人民の狂熱的愛情を以て迎へられたり。夷は行はれ、ウワイマルは再び呼吸せり。ゲーテは此機に乘じてウ井ルヘルム、テルの史詩を作らんと企てたり、然りしかども千八百七年四月十日、公爵老夫人アマリアの薨去に依つて、彼の落想は空しくなりぬ。

アマリア公夫人の薨去。

彼をして老後の醜聲を放たしめたるベッチナは、其月二十三日を以てウワイマルに來れり。是ゲーテが『ウエルテル』時代に、フランクフヲルトに於て共に戲れたりしマキシミリアヲ、ブレンタノの女にして、處女と云ふよりも、寧ろ妖怪に近き魔婦人なりき。

ベッチナ。

彼の女は久しくゲーテの愛する所となりたりき。人或は『一小女ゲーテとの通信』に依つて、彼の痴情を斷じ、或は彼の女の書翰に依つて、彼の詩料を集めたりと爲せり、然りしかどもリーメルの云ふ所に依れば此『通信』は一の傳奇に過ぎず、其短歌の如きも、彼の女にのみ與へたるものにはあらず、ミナ、ヘルツリーブに與へたるものも亦多かりき。

ミナ、ヘルツリーブ。

ミナ、ヘルツリーブは、イエナの書肆フロムマンの家に養はれたる一處女にして、『撰擇抱合力』（ウワーフエルワントシヤフテン）一八〇九年十月三日發中のオッチリなりき。彼の女はゲーテの特に熱愛したりし所、然りしかども彼の女は彼と別るゝが爲に、學校に送られたりき。之に依つて、幸に彼等の苦艱は猶薄かりしなり。彼の女は其後薄命なる結婚をなせり、千八百十年彼は再び情歌を作つて、彼の經驗を吟じたり、即ち『恩愛と義務』との戰爭を詠じたるものなりき。然りしかども此詩の性質は、公行を沮め、

『自叙傳』。

母の喪に丁る。

遂に未定稿として、長く篋底に秘せられたりき。

彼は此年を以て『自叙傳』を草し始めたり。翌十一年第一卷を行へり。

而して彼の久しく愛したりしペッチナは、『技術展覽會場』に於て、メイエルの作を譏刺したりしかば、ゲーテ夫人の怒る所となり、乃ち此年を以てウワイマルを去れり。

是より先き彼は母の喪に丁れり。母は千八百八年九月十三日七十八歳を一期として此世を辭せり。而して彼の生前母を愛したりしことは、實に彼の女の幸福なる老齢の光榮なりき。彼は母をしてウワイマルに住ましめんと欲したりき、然りしかども、フランクフヲルトの諸朋友と、舊習慣の勢力とは、彼の女の最愛したる故鄕に止めたりき。

〔其二〕 ゲーテとナポレオン

佛露の皇帝エルフヲルトに會す。

ナポレオン。

ナポレオン『ウエルテル』を七讀す。彼の人を看よ。動一等十字章。

近世的生活と其意向との代表者、今や互に一場に會見せんとす、亦奇ならずや。

千八百八年九月佛露の皇帝、他の小帝王とウワイマルの西方、十三哩のエルフヲルトに相會しぬ、即ち『エルフヲルト會議』なるもの是なりき。

タルマは巴里俳優の一座と共に、君王花壇の前に演ぜり。斯くてナポレオンはウワイマル公及ゲーテ、ウ井ーランドを歡待し、共に文學歴史の事を談じたり。

ゲーテのエルフヲルトに之きたるは、九月二十九日にして、翌日ウワイマル公の設けたる大饗筵に列し、十月二日佛帝に拜謁し、且つは陪食を命ぜられたり。此時帝の傍に在りしはタレイランドとダルにして、背後に立ちしはベルシエとサ

ヴァリーなりき。ナポレオン引見して曰く。『卿若かし』再び曰く、『卿何歳ぞ』。答へて曰く、『六十』。曰く、『卿甚だ能く若きを保もつ』。曰く、『卿は悲劇を書きしや』。此時ダル言を挿んで、ゲーテの作の艶温を語り、且つ彼がヴヲルテールの『マホメット』を譯したりしことを云へり。ナポレオン曰く、『そは好著にあらず』と、而してマホメットを評して、庸人の如くに言ひ、遂に『ウエルテル』に話到して、彼の七回之を讀み、且つ埃及遠征中も、之を手にして放さゞりしことを語り、卷を開きて其短評を試み、斯くて再び劇場に入り、佛國の戲曲は、多く自然に乖離せる所ある所以を摘出して、鋭く之を批し、遂に一時間にして會見の事終れり。ナポレオンはゲーテに問ふに其兄と家族との事を以てし、言々甚だ温籍を極めぬ。ゲーテ室を去るや、ナポレオン、ベルシエとダルとを顧みて曰く、『彼の人を看よ』と。

ナポレオン『ウエルテル』を七讀す。

彼の人を看よ。

數日の後ナポレオン、ウワイマルに在り、大祝典は彼の爲に開かれ、イエナの舊戰場には遊獵催され、宮掖に於ては夜會あり、劇場にては『該撒の死』演ぜられ、而してダルマはブルタスに扮したりき。夜會の間ナポレオンは、ゲーテ及ウヰーランドと古今の文學を論じ、談悲劇の事に及ぶや、ナポレオンはゲーテに告ぐるに、『該撒の死』をヴヲルテルの文章よりも、更に大に書かざるべからざる事を以てせり。然りしかども彼の老齢に於ては悲劇を草するよりも、彼を伴ひて巴里に行かしめんと誘ひたるは、彼の心を動すこと、如何に多かりしとするぞ。

十月十四日彼とウヰーランドとは勳一等十字章（レギヨン、オブ、オーノル）に叙せられ、二帝は遂にエルフヲルトを去れり。而してゲーテは彼とナポレオンとの會見に關して、默すること多く、數年の後、彼當時の事を記するや、

勳一等十字章。

極めて簡畧に叙し去りたりき。亦惜からずや。嗚呼近世史中の二大人物は、遂に斯の如き會合に終りたりき。往時を追想して今奈何。

〔其三〕人生は豫言尼の書に似たり

ウヰーラント長逝す。獨立戰爭。非難は起りたり。自家の發達と國民の教育。彼の夢は常に日耳曼なりき。晩年の紀功碑。白鷺勳章。シャーロッテ訪ふ。ゲーテ夫人歿す。アウグスト歿る。彼の晩年斯の如く忙し。人生は豫言尼の書に似たり。名聲宇内に喧し。老いて猶壯。レウエゾー嚢。ザイマノスカ。版樞保護の特樞を與へらる。スタイン夫人沒す。十字大勳章。公爵薨す。公爵夫人亦薨す。生物學上の論爭を評す。アウガスト羅馬に客死す。然り請ふ少らく待て唯今爾も安息を得ん。神經熱に罹る。詩人歿す。

『アウウスト』の第一部は千八百六年に完結して、千八百八年に印行せられたり、之に尋で彼がニユートンに抗背して、視學上の定見を立てんと欲したる、『色學』(フアーベンラーレ)は遂に公にせられたり。超へて數年、即ち千八百十三年一月二十日、老友ウヰーラントは長逝せり、是彼を動かすこと如何に多かりしとするぞ。彼は老年に迨んで既にヘルデル(一八〇三年十二月十八日卒)を喪ひ、シルレルを喪ひ、公爵老夫人アマリアを喪ひ、彼の母を喪つて、而して今は又ウヰーラントを喪へり。知己漸く墜ち去るもの一個又一個、其齡の傾くに隨つて、彼は寂寥の中に棄てられたり。

ウヰーラント長逝す。

獨立戰爭。

彼の不幸は之に止まらざりき、政治上の大難は、彼の畫策を沮めんとて臻ること頻なりき。即ち日耳曼人はナポレオンの專制に抗背して蹶起せり、所謂『獨立戰爭』なるものは是なりき。愛國者の血は正に沸騰點を經過せり。而して彼は『技術』の中に其避場を覓めたりき。彼は『デル、トツテンタンツ』、(死者の舞踊)『デル、ゲトロイテ、エツカルト』(眞實なる

エッカルト及『ヂ、ウォンデルンデ、グロッケ』(感心し易きの歌を作り、『シェークスピーア、ウント、カイン、エンテ』(シェークスピーアの不朽)の論文を草し、『自叙傳』の第三卷を了り、支那史の研究に全心を集めたりき。否ライプシッヒ血戰の當日に於ては、彼の嬖好せる女優ウヲルフの爲に悲劇、『エッセックス』の落末(エピログー)を草するに忙はしかりき。

非難は起りたり。

非難は起りたり。愛國黨の記者等は、國難を追れて、『詩』に隱るゝ彼を罵つて、『自愛者』(イゴチスト)なりと擯斥せり。正に是四面楚歌の聲。

自家の發達と國民の教育。

彼は斯る間に在りて、自家の發達を全うし、國民の教育を大成せんと企てたりき。彼の晩年は靜穩なりしかど、彼の同情は活潑なりき。彼は科學上の新發見、文學上の新現象、技術上の新約束を望んで已まざりき。彼は千八百十五年に於て『ウェスト、エスタリッシェ、ヂヴワン』(一九一九年發)を著し、以て文學界に新紀原を開きたりき。彼は正に『東方』に心醉して、其史詩を喜び、或は想像の中に『隊商』に隨つて徐に大漠を度り、泡沫の淙々たる泉頭に、波斯(ペルシア)鶯の哀歌を聞き、或はモハメットの訓戒に耳を欹て、或は詩人ハフィツの曲調に魂を奪はれ、或はフワン、ハンメル、ド、サシー等に依つて材料を集め、或は鴉牙、『フチーカー』に恍惚たりしかど、彼の夢は常に日耳曼なりき、彼の歌も亦常に日耳曼なりき、而して又常に獨創的なるを失はざりき。

彼の夢は常に日耳曼なりき。

彼は又翌千八百十六年に於て、技術雜誌『クンスト、ウント、アルテルスム』を發行して、之を千八百二十八年に至るまで繼續したりき。是實に不思議なる一老翁の、勵精と氣力とを表彰する紀功碑なりき。

晩年の紀功碑。

而して最奇とすべきは、彼の理想、其方向を一轉して、正に反對者に近づかんとしたるにありき。即ち彼の『プロピレエン』(一七九八年發文學技術雜誌)の意向は希臘的なりしにも拘はらず、『クンスト』(ローマンチックスクール)の意向は羅馬派に偏

白鷺勳章。

シャーロッテ訪ふ。

倚したりしことは是なりき。然りしかども『エルギン大理石』の發見は、再び彼をして希臘技術に復らしめたり。

此年サクセ、ウワイマルは大公國に列したり。彼は白鷺勳章を受け、俸給增して三千弗となり、別に服裝料を賜はりたり。

彼が曾てウエッツラーに於て切戀したりしシャーロッテは、十二個の子女に母として、已に孀婦となり、ウワイマルに來つて彼を見たり。彼等相別れてより、茲に見さること四十四年、如何に年處の彼等の紅顏を剝ぎ、彼等の氣力を奪ひ、又將に彼等の生命をも食はんとするに對して、感動すること多かりしとするぞ。又如何に彼等の樂しかりける過去を追懷して、涙を呑むこと頻なりしとするぞ。彼は命長きが爲に、屢〻人生の悲觀を見たり。彼は復將に感情に一震動を受けんとはずなり。彼の半身として、彼を助けたること二十八

ゲーテ夫人歿す。

アウグスト娶る。

年なりけるクリスチアネは、方に病んで褥中に在りき、彼は其傍に跪き、肅然として悲み言へり、『卿は予を棄てざるべし。否、々、卿は予を棄つべからず』と。然りしかども無益なりき、彼の女の天命に依つて瞑すべき目は、終に長く閉ぢたりき。彼は再び彼の女の視るに任かすること能はざりき。

彼の家の寂寞は、翌年彼の子アウグストが、オッチリ、フワン、ポジウ井ッシを娶りたるに依つて破られたりき。而して其翌即ち千八百十八年に、彼の第一孫を擧げたるに依つて、益〻彼の慰藉となれり。彼は常に忙しかりき。彼はデベライチルと共に、『化學』を究め、或は『形體學』上の新著を印行せんと欲し、或は希臘神仙譚、英文學、及『ゴシック』技術を研究して撓まざりき。彼は『クンスト』紙上にバイロンの『マンフレッド』を詳論して、近世の最大著作なりと歡迎し、

彼の晩年斯の如く忙し。

又盛にスコットを稱揚して休まざりき。彼は又繪畫、彫刻、建築學、地質學、氣象學、解剖學、視學、東洋文學、カルデロン及佛國に於ける羅馬派等の好題目を掲げ來つて、其無盡藏の活力を用ひたり。

彼はエールスタットの磁電學上の大發見を聞きて、デベライチルに其現象を驗せしめたり。彼はダルトンの『樹懶及巨懶』(スロッス、アンド、マガセリューム)を以て、解剖學上至要の好著なりと宣したり。而して彼は『佛國從軍行』、及彼の『年譜』を作り、又技術上の論文、小詩、短歌『ザーメ、ゼニエン』、希臘近世の歌謠の飜譯、イウリパイデースの失劇『フォートン』の回復に努めたりき。彼の斯の如く刻苦勉勵して已まざるは宜なりき。彼は言へり、『人生は豫言尼(シビリヂスブック)の書に似たり、殘する所僅少となるに隨つて更に暮しくなるものなり』と。彼は老するに隨つて寸陰も是足らずとなし、彼の生來好みたる交際場裏へも行かざりき。

人生は豫言尼の書に似たり。

名聲宇内に喧し。

彼に對する國民の反感は強かりしかど、彼の名聲は伊、英、佛の三國に喧傳して藉々たりき。彼はマンゾニ、スコット、ベイロン、カライル、スタッフエル、アンペン、ソーレット等の稱揚して已まざる所となれり。

老いて猶壯。

彼は老いたりしかど、猶鑠鑠、體軀肥胖康壯にして、額上漸く一皺を就けしと雖、其頭禿するに至らずして、褐色の巨眼は舊に依つて烱々人を射れり。當時醫師フフェラントは、軀幹に於ても、精神的組織に於ても、ゲーテの如く、完全なる人を見しことなしと云ひたりき。

レウエソー嚏。

宙に生命のみにはあらざりき、生命の生命たる『愛の力』は、猶般々として銷せざりき。彼は年七十四にして、マリーンベットにフレウライン、フワン、レウエソーに逢ひ、彼の愛情は挑發せられて、再び『ウ

エルテル』時代に回りたりき。彼は彼の女と婚せんことを欲したりしかども、朋友の苦言嘲笑を慮りて止めたりき。彼は彼の女の家を辭し去る馬車の中に、『マリーンバットの悲歌』を唱へて慰めたりき。而して此父にも等しき老翁を戀ひたりしは、啻に彼の女のみにはあらざりき、ザイマノスカも亦彼を慕ひて狂せんばかりになりたりき。

ザイマノスカ。

千八百二十五年は、彼の爲に最記すべき年となりたり。『聯合議會』は、彼の著書を、日耳曼市中の版權剽竊より、保護すべしと議定せり。彼は是に於てか漸く日耳曼人民より、版權保護の特權を與へられたり。此時に及べるまで徒に書肆を富したる彼の著書は、此緩漫なる議定に依つて、辛くも彼の子孫の督に歸したり。

版權保護の特權を與へらる。

千八百二十七年（七十八歳）一月六日、彼の舊情人男爵夫人フワン、ズタイン、八十五歳を以て鬼籍に就けり。其八月二十八日、即ち彼の誕辰當日には、ペフエルン王、ウワイマル公に導かれて彼の書齋に到り、授くるに十字大勳章を以てせり、是皇帝の允許なくして、受くるを得ざる所なりき。而して翌千八百二十八年六月十四日、彼の最親好したりし善公爵、カール、アウグスト遂に薨ぜり。

十字大勳章。

公爵薨ず。

彼は其翌年『流涙の年』を完成し、更に『フワウスト』第二部を草し、又彼の『植物化醇論』を飜譯せる、佛國の少年ソーレットを侍せしめて、自ら之を校閲せり、而して翌千八百三十年二月、大公爵夫人ルイセ亦薨せり。彼が晩年の黄昏は將に夜の影を齎し來ることを急なりき。

公爵夫人亦薨ず。

彼は猶撓まざりき。彼はカールライルの『シルレル傳』に序し、巴里に起りたるクヴ井エー、ヒレーヤの動物學上の大論爭に眼を注ぎ、之が評論を作りてヒレーヤを援け、九月遂に其第一部を公にせり。

生物學上の論爭を評す。

アウグスト羅馬に客死す。

十一月凶報は彼の心底を震はしたり。是彼の最後に聞きたる訃音なりき。即ち彼の息アウグストの十月二十八日を以て、羅馬に客死したるを報ずるなりき。彼は悲哀を消せんと欲して、間斷なき著作に勵みたり、彼は之が爲に肺咯血を來たしたり。

彼は幸にして癒へたりしかば、ベランヲエ、ユーゴー、グラヴ井グソ、スコット、カーライルの著を愛讀し、オッチリをしてプルタークを朗讀せしめ、『フワウスト』第二部の完備に急ぎたり。嗚呼彼の手は死の使に掴まれながら、猶筆を揮つて輟まざりき。

ウワイマルは今や彼の珍らしき誕辰節を祝せんとて騷がしかりき。時に見る青色の帽子を輕く戴き、同じ色の外套を被りて、徐にイルメナウの山嶺に登り、其左右の手を背後に廻らして、立ちやすらふ一老翁を。是即ち彼の最後の祝典を避けて、澄空暖日に、山野の清

風を趁ふて來れるグーテなりき。彼はギッケルハンの第一峯に攀ぢ、曾てカール、アウグストと幸福なる閑日月を送り、スタイン夫人と飴の如き情話に多時を消したりし、木作の一小舍に達し、此處に舊時自ら鉛筆を把つて手書したりし壁上の句を見たり。

山嶺の最高頭
Ueber allen Gipfeln
寂々として萬象幽なり、
Ist Ruh,
此處
In allen Wipfeln
慇懃に覓むれども
Spürest du
微風戰がず、

然り請ふ少らく待て唯今爾も晏息を得ん。

Kaum einen Hunch;
林間の小鳥亦閑に休す。
Die. Vögelein schweigen im Walde.
請ふ少らく待て、唯今
Warted nur, balde
爾も亦晏息を得ん。
Ruhest du auch.

讀み了つて。彼は涙を拭ひ、更に太息して醫復せり、『然り、請ふ少らく待て、唯今爾も亦晏息を得ん』と。

此晏息は速に彼に近づきたりき。翌年三月十六日、彼の孫ウヲルフガン（時に年十四歳）平常の如く、彼と共に朝餐を喫せんとて、彼の寢室に誘ひ訪へば、猶困臥して褥中に在るを認めたり。是一日前に園中を逍遙して、寒冒を得たるなりき。醫來りて診すれば、ウワイマルに名

神經熱に罹る。

高き『神經熱』にして、殆んと疫病の如き劇症なりき。然りしかども藥石の効に依つて、黄昏に至る比には、談じ且つ戲るゝことを得るに至り、翌十七日にはフンボルトに長翰を裁しゝほどに、快くなりたりしかば、危かるべしとの虞は止みたりき。

超へて一日、即ち十九日の夜に於ては、一時安眠したりしかど、深更に迫んで、四肢遽に氷の如く冷へ、胸部の劇痛と壓搾との烈しくして、遂に之が爲に覺めたりき。然りしかども苦痛のみなりしかば、危からじと言ひたりし醫を、煩はすにも及ぶまじとなして曉けたり。醫夙に來りて再び診すれば、病の既に甚しく革まれることを見たりき。齒は寒戰の爲に鳴つて戛々たり。胸痛は益劇しくして、呻吟叫号の聲は尋いで起れり。彼は靜に伏すこと能はずして、褥中に輾轉動搖せり。彼の顏色は灰の如く青きを呈し、窩中に深沈せる兩眼は

重くして、其一瞥は死の近きことを表はせり。瞬時の後此恐るべき病徴は減退して、彼は褥中より傍の安樂椅子に移りたり。斯くて日の沒する比に至るまで笑談し、且つは其戰慄せる手を以て、ウワイマルの年少貴女たる、彼の好みし技術者に、養老金を保證して公文に署したり。

翌二十一日に至れば、苦痛は悉く去りたれども、感覺は鈍り始めたり、而して人事不省となりしこと少時。漸くにして老僕に命じ、臥病の當日讀みさしたりしサルヴワンダーの『革命及革命者の十六箇月間』を携へ來らしめ、數葉を飜へして、讀むに堪へずとなし、之を傍に擲てり。斯くて存問者の名簿を命じ之を一々點檢して、再健の後其厚意を謝すべしと談り、其夜は彼の掌書記の外悉く之を寢に就かしめ、老僕の傍に侍して、與に起座せんと請ふをも許さいりき。

翌朝彼は少しく室内を歩まんと試みたりしかど、一轉回の後は、再びすべき勢なきを覺りたり。彼は復安樂椅子に倚りて、オッチリと共に春の近づくを樂しげに語り、春に到れば彼の必ず癒へなんことを告げたりき。

忽ちにしてオッチリの名は彼に依つて呼ばれたり。彼の女は傍に座し、兩手を以て其手を支へたり。彼の思想は不調子に彷徨し始めたり。彼は呼べり、『看よ、愛らしき女の子の頭を、綠の髪と、輝ける色と、黑き陰とを』と。彼は忽ちにして床上の紙片を見て、シルレルの書を何故に斯くは冷遇するぞと詰り、靜に彼の頭を横へて睡りたり。少時にして覺め、彼が今見たりし所の小品文は、何處にありやと尋ねたり。是彼の夢に見たりし所なりき。彼の談る所は彌〻人事に遠かりき。最後に聞くを得たりしは『更に光明』の二語なりき。

彼は力の續く限りは、食指を以て空に書し、猶何事をか語りたりき、而して終に生命の干潮となりたりし時に、徐に彼の指を兩脚に掩ひ、あり、し搭膊巾の上に置き、午時を過ぐること半刻にして、自ら椅子の一隅に身を寄せたり。傍に在りしオッチリは、彼の唇に一指を觸れ、竟に彼の眠りたることを知りたりき。嗚呼若し是一の眠に過ぎざりしならば、大なる生涯の、此世より飛び去りたる眠なりき。時に十九世紀の三十二年、三月第二十二日。

* * * * * *

彼は已にウワイマル一抔の土と化したり、彼の墓の左右には今も猶彼の『我公』カール、アウグストと、彼れの親友にして競爭者なりけるシルレルとは與に眠れり。生きては則ち時を同うし、死しては則ち墓を同うす、彼亦以て瞑すべきなり。

結論　近世的精神とは何ぞや

八面是眼。主觀的にして客觀的。精鋭なる批評眼。明解なる理解力。耐久的能力。現實化するの魔力。予は唯人のみ。吾人は經典を書かざるべからず。

嗚呼是彼の一生なり。何ぞ夫れ瑣瑜綜雜して、解するに難しとするぞ。さすが精嚴達識のカーライルすら、『ゲーテの品性の如く不明模稜にして、解し難きは、恐く、危險なるは、近世の文學問題中稀に見る所なり』と自白したるにあらずや。吾人豈大膽に悉く彼を知れりと言はんや。

然りと雖も吾人は彼の爲に、少しく其觀察したる所を概言して已まんと欲す。

第一彼の品性中、最吾人の目を惹けるは、則ち八面是眼（メニーサイデッドアイス）にあり。是

彼をしてあらゆる感化と、あらゆる刺激とに其心を開かしめたる所以にあらずや。是彼をして文學、科學、及技術の『百科字彙』たることを得せしめたる所以にあらずや。否社會の根底を窺ひ、人生の極秘に達せしめたる所以にあらずや。彼が近世的生活と、其意向との『代表者』たりしもの、實に此の一點にあり。

主觀的にして客觀的。

第二は彼の主觀的なると與に、客觀的なること即ち是なり。彼は大なる創造力を有すると共に、又大なる收得力を有したり。是彼の獨創と智識とをしてシエークスピーアの如く多樣ならしめたる所以にあらずや。是彼をして近世の最明白にして、又最巨大なる『思想家』たらしめたる所以にあらずや。

第三は彼の精鋭なる批評眼なり。彼は恰も日耳曼古譚中の三目小女(ドライエルクワイン)に似たり。彼は常に睡眠し、涕泣する兩眼を有すると共に、又此睡

精鋭なる批評眼。

眠と涕泣とを注視する一眼を具ふ。即ち彼は自家の經驗をすら之を判じ、之を斷ずるに難からざりしなり。是彼をして人生に於ける『批評の達人』たらしめたる所以にあらずや。

彼は斯の如き大なる天品を有すると共に、明快なる理解力を具へ、勇邁なる心意を以て、耐久的能力を鼓し、以て絶へず其事業を續けたり。加之彼は得たる所の材料を以て、悉く之を現實化するの魔力を有せり。即ち彼の腦隨の廣大なる精錬所に入り來れるものは、必ず化學的作用を起さずんば已まざりしなり。是彼をして容易に、『近世的精神』たることを得せしめたる所以にあらずや。

明快なる理解力。

耐久的能力。

現實化するの魔力。

之を要するに彼はナポレオンと共に、猛烈なる現實家として、此世に來りしなり。即ち彼は此時代とあらゆる時代とに向つて、令貌假聲の毒樹根に、鋭利なる大鐵斧を打ち込みたり。書籍と器械との重

予は唯人のみ。

荷の下に、壓抑せられて煩悶苦惱せる人に向つて、此山岳の如き堆積を排拓して、之を自家の用とするには、如何に爲すべきかを敎へたり。而して此使命を帶びたる彼は、彼の衷心より、彼の意志と經綸とを紡き、曾て偃息退休するが如きことを爲さず、各般の追求勵精に依つて、八十年の長勞作を保ちたり。彼曰く、『予は唯人のみ、予は人の爲に呼吸し且つ勞作す』と。天は假令彼に對して默したりしとするも、地は彼の爲に雄辯なりき。世界の爲に生れ、世界の聲を叫びたる彼の事業は、洵に此の一句に盡く。又何をか加へんや。彼れを稱して『近世的精神』と言ふものは此謂なり。故に曰く、近世的生活と、其意向とを讃するものは、則ち彼を讃せよ。彼は實にナポレオンと共に近世史の半面を分てるなり。

吾人は經典を書かざる可らず。

ゲーテは吾人に勇氣を敎ふ。あらゆる時代の平等を敎ふ。何れの時に在りても、喪心は是不利なるのみ。天才は最暗黑にして、又最聾聵なる時代に依つて、其光輝と聲音とを放つ。世界は少年なり、先き立てる偉人は吾人を招く。吾人は再び天と地とを結合せんが爲に、經典を書かざるべからず。天才の秘密は、無稽の事を語るにあらず、唯吾人の知る所のものを以て、之を現實化するのみ。近世的生活の精錬に於て、技術に於て、科學に於て、人に於て、善信仰、善現實、善目的を要求し、最初に、最後に、中間に、而して無朽に、あらゆる眞理を實用するに依つて、光榮あらしむるに存するのみ。吾人の責任亦重からずや。

ヨハン、ウチルフガン、ゲーテ終

明治廿六年十一月廿七日印刷
明治廿六年十一月三十日發行

定價拾八錢

版權所有

著作者　東京京橋區木挽町十丁目四番地　高木伊作
發行者　東京々橋區日吉町七番地　垣田純朗
印刷者　東京々橋區西紺屋町二十六番地　島連太郎
印刷所　東京々橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍
發行所　東京々橋區日吉町四番地　民友社

6/.

7.6
118

70
118

084709-000-8

70-118

ゲーテ

高木　伊作／著

M26

DBA-0033